ここはどういう場所で、どんな暮らしがあったのだろう
地域資源を再発見／再認識／再考する

RE：プロジェクト 通信

その場所にあった記憶を探して 0

てがみ

武田こうじ

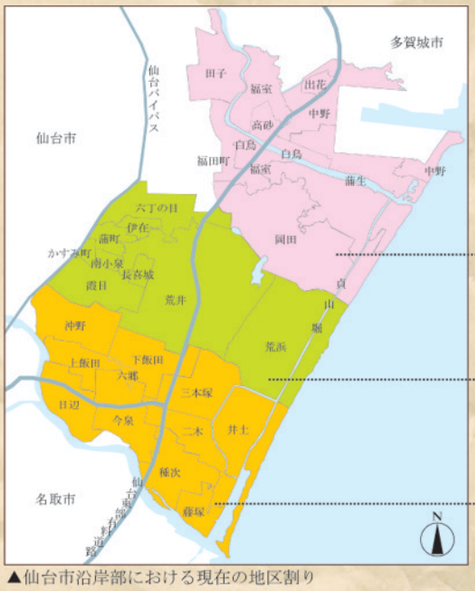
ときのながれにそっと
てをのばすように
すなはまにゆれる
いっぽんのき

ことばにできない
そんなことばにかこまれて
まちはないた

あれもこれも
あいしていた

あのひから
わからない
くりかえし
てがみをかいている

ここであなたとであい
ここであなたとくらし
ここであなたにふれる



▲仙台市沿岸部における現在の地区割り

この地域を知るためのメモ

高砂村
福室村、岡田村、田子村、蒲生村、中野村が合併して出来た。七北田川の河口に位置する蒲生には、仙台城下に至る水運の要所として運河や馬車軌道が通じていた。

七郷村
小泉村、蒲町村、霞目村、伊在村、六丁目村、長喜城村、荒井村、荒浜が合併して出来た。古くからこの一体を「七郷」と呼んでいたことが由来となっている。

六郷村
日辺村、沖野村、飯田村、今泉村、二木村、種次村、井土浜、藤塚浜が合併して出来た。このエリアも古くから「沖六郷」と呼ばれていたことに村名が由来している。

「RE：プロジェクト」で取り上げるのは、東日本大震災で津波の被害が大きかった仙台市内の地域――かつては「高砂村」「七郷村」「六郷村」と呼ばれていた地域です。

このあたりは、5000年前までは海でした。約6000年前以降の海面がわずかに上下する海面微変動期において、河川から排出された土砂が堆積をくり返し、今の仙台平野が出来上がっていきました。今の海岸線が出来上がったのは、およそ800年前以降だと言われています。

この地域が田畑として開拓され人々の暮らしが営まれるようになったのは、1640年(寛永17)から1643年(寛永20)に実施された「寛永検地」によって新田開発がなされるようになってからです。この寛永検地によって村々の境界も決まっていきました。現在の地名のほとんどが当時の村名の名残です。

時代は明治になり、地方分権・地方自治を目的とした「町村制」が公布され、江戸時代には70余りあった村が、1889年(明治22)には14ヵ村に統合されました。その時に出来たのが、高砂村、七郷村、六郷村です。

その後、仙台市の発展に伴い、1928年(昭和3)には七郷村南小泉地区が、1941年(昭和16)には高砂村、七郷村、六郷村が仙台市と合併し、現在の市域となりました。

ここには、たくさんの風景がありました。

例えば、「居久根(イグネ)」のある風景。かつて仙台藩では有用樹木の植林をさかんに奨励しており、私有地においても居久根として杉をはじめ、ハンノキ、栗、欅、赤松、桜、檜、竹など多種多様な木々が植えられました。こうして密度を高めることで防風・防雪・防霜の効果を上げていたといいます。更に、杉は家屋を建てる際の部材に、それ以外の樹木も燃料や堆肥、食料などとして様々な恩恵を与えてくれていました。

「半農半漁」の暮らしもこの地域の特徴でした。大きく広がる太平洋での漁業だけではなく、明治時代に開削された貞山堀においてもシジミ漁がさかんに行われていました。「ジョレン」と呼ばれる先端に金属製のカゴが付いた竿を使ってのシジミ漁の光景は、この地域の生活の一部でした。

江戸時代から灌漑用水として重要な役割を果たしてきた七郷堀と六郷堀もそうです。広瀬川から分水した堀は、広くこの地域を潤し、農業だけではなく、野菜や着物を洗う生活用水として、また、泳ぐ魚をねらった子どもたちの遊び場として役割を果たしてきました。

たくさんの暮らしがあった場所。たくさんの記憶が積み重なった場所。その場所は今、3月11日の大震災によって大きな痛みを抱え、かつての姿を失いつつあります。そのままの同じ姿を取り戻すことはできないかもしれません。しかしながら、私たちは「かつての姿」を記憶にとどめ、忘れないでいることはできるはずです。

この「〈RE：プロジェクト〉通信」では、地域に積み重ねられた記憶を集めて綴っていきます。たくさんの記憶が集まったとき、そこには淡くて懐かしい「かつての姿」が浮かび上がるかもしれません。

【参考文献】
・仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編１～８』仙台市、1999年－2011年
・(有)タス・デザイン室編『ふるさと七郷 もうひとつの仙台』(有)タス・デザイン室、1993年

｜編集後記｜

今回は「RE：プロジェクト通信」のスタート号として、ライターの西大立目祥子さんと詩人の武田こうじさんに、津波の被害に遭った場所を歩いた時のことを言葉にしていただきました。そこに立つと、目の前の状況に自分の無力さを痛感させられます。しかしながら、これからお二人とともに、再び同じ場所を歩き、そこに住まわれていた方々にお話をうかがいながら「その場所の記憶」を紡いでいくことが、今できることの一つなのではないかと考えています。

くり返し、くり返し、今を丁寧に見ていくこと。それは、将来どんな街にしていきたいか希望を語ることにつながると思います。一日も早い復興を願い、地域に根ざした取り組みを展開していきたいと考えています。(田)

次回は
9月上旬に
発行予定です。
ウェブサイトも
ぜひご覧ください。

◆ウェブサイト
http://www.sendaicf.jp/contents09.html
◆ツイッターアカウント：RE_project

『RE：プロジェクト通信』第0号　2011年8月発行
※この紙はリサイクルできます。
【主催】仙台市・財団法人仙台市市民文化事業団
【編集・発行】財団法人仙台市市民文化事業団　事業課事業企画係
〒981-0904　仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5　TEL:022-301-7405／FAX:022-727-1874／info@sendaicf.jp

まちの記憶

語りつくせない思い出の中から、再び

西大立目祥子

●復興のかけ声からこぼれ落ちるもののために

恐ろしさと寒さにふるえたあの日から、はや5ヶ月がたとうとしている。小雪は桜に変わり、若葉の緑はずんずん濃くなって、季節は夏の真ん中までめぐってきた。

たいした被害はなかった私でさえ、やはり3月11日の前と後で時間がひどく断絶しているように感じる。友人、知人たちも、会えば決まって口々にこういう。あの日から、もう何年もたった気がする、と。

それはたぶん、想像を絶する体験をしたからだ。あり得ない映像をくり返し見せられ、見慣れた風景ががれきの山となったのを眺め、親しい人とある日突然会えなくなるというような時間が、圧倒的な密度で等しく私たちの上におおいかぶさった。深刻な被害を受けられた方は、どこか夢でもみているような時間を過ごしているのかもしれない。

それでも、この5ヶ月の間にライフラインは復旧し、仮設住宅での暮らしが始まり、がれきは撤去されて、復興は少しずつ進んだ。仙台のまちの真ん中は、もう震災の影響はほとんどないといっていいにぎわいだ。ショッピングやスポーツ観戦や祭りには、大勢の人たちが集まる。

その明るい変化を喜びながらも、私の中には小さなとまどいが巣くっている。「がんばろう！」という元気なかけ声が届かない人もいるのではないか。津波の押し寄せた地域は、やがて忘れられていくのではないか。そもそも、「復興」とは、住まいと仕事が用意されれば、それで成し遂げられることになるのだろうか……。

痛めつけられた人や地域が力を回復していくためには、家とお金と産業が必要なのだろうが、それだけでは足りないと私はかんがえる。時間をかけてていねいに、互いの言葉を受けとめ、記憶をたぐりよせていく作業がなければ、本当の復興はたぶんないだろう。これまでどんな人とどんなふうに暮らしてきたか、地域はこれまでどんな歩みを積み重ねてきたか。それぞれの人がそれぞれの場所で、自分の思い出をよみがえらせ、互いに確かめ合うことなしには、未来への一歩は踏み出せないと思う。なぜなら、人も地域も歴史を背負って生き続ける存在だからだ。

これは【RE:プロジェクト】である。「RE」とは、「再び」を意味する。被災地が再び、心安らぐおだやかな暮らしと日常の時間を取り戻すために、私には何ができるだろう。

●命あるものの輝き

6月に入って、ようやく私は、この大震災で深刻な被害のあった市内の沿岸部を訪れることができた。それまでにも、大船渡、陸前高田、気仙沼など、津波による甚大な被害を受けた三陸のまちを見る機会はあって、なすすべもない感情を味わってきたのだが、若林区、宮城野区の地域を見たときは、そこに何ともいえない喪失感が加わった。子どものころから何度も渡った貞山堀のほとりの家々は消えていた。取材に通った藤塚では集落の入り口から海までが、きれいにすっぽりとさらわれていた。蒲生では見覚えのある家々が泥に汚れていた。慣れ親しんだまちが力づくで荒らされ、まるで知らない場所のように姿を変えているのを見るのはつらい。一、二度訪れただけの私が喪失感にとらわれるのだから、暮らしていた方はいったいどれほどの痛みで(✓)

我がまちを眺めているのだろう。

歩いていると、ときおり自転車をゆっくり走らせる男性と行き交う。自転車を止めてじっと風景を眺めると、ため息をついてどこかへ消える。変わり果てた町並みを、毎日信じられない思いで避難所から眺めにきているのかもしれない。

すべてが失われたまちでは、いったい自分がどこにいるのかがわからなくなる。ここはどこ？　それを教えてくれる定点がないと、被災者は自分の家を見つけ出せない。今後、建物が撤去されてしまったら、生き残った杉木立やケヤキをたよりに、人々はかつての家の場所を知ろうとするだろう。こうした樹木が伐られることのないように心から願う。震災前と震災後をつなぐケヤキは、まるで希望を与えるかのように風に緑の葉を揺らしていた。

不思議なことに、廃墟の中で、目はおのずと生きているものを探していた。砂浜のハマヒルガオ、庭先のラン、倒れかかった枝先に開いた緑の葉…小さな花や葉がこんなにも輝きを放つものであったとは。

●村の暮らしを思い起こす

夏、閑上に抜ける県道を走れば、青々とした田んぼの向こうに仙台市街が広がり、遠くには蔵王から泉ヶ岳へと稜線が連なる。それが仙台市内沿岸部の変わらない風景だった。その風景が今年はない。江戸時代初頭から、湿地の水を抜き、耕地に整え、さらに用水堀を張りめぐらせて400年近く営まれてきた水田に、この春、水が張られることはなかった。いまだがれきが散乱している田んぼも多い。

甚大な津波被害を被った若林区の二木、種次、井土浜、藤塚浜、そして宮城野区の岡田、中野、蒲生は、水田開発とともに村の暮らしを立ててきた。海岸に近いこの地域は、貞観の大津波(869年)、慶長の大津波(1611年)でも大きな被害を受けている。慶長の大津波のあと、人々は鍬を持ち広大な水田を開いていったのだ。

豊作のよろこび、干ばつや冷害の苦しみ、農民の汗も涙も笑いも写してきたのが広大な水田だ。手もとにある明治38年(1905)の地形図を見ると、大きないくつもの沼とともに、富岡、山路、長屋敷など、水田の中に散らばるように集落があったことがわかる。いま七郷の長喜城に残るような豊かなイグネを家のまわりに配して、農家の暮らしが営まれたのだろう。仮に、もし、この地域に人が住むことが難しくなったとしても、積み重ねられてきた歴史を忘れたくはない。

いや、いまこそたずねるべきときなのだ。村の暮らしはどんなものでしたか、と。語りつくせない思い出話の中で、被災した方々は大震災で失ったものを取り戻していくのかもしれない。私は、あふれるように出てくる言葉をしっかりと受けとめよう。